

隠岐本新古今和歌集と久原本

小島, 吉雄
九州帝國大學法文學部國文學研究室助教授

<https://doi.org/10.15017/10578>

出版情報 : 九大國文學. 1, pp.21-48, 1931-09-01. 九大國文學研究會
バージョン :
権利関係 :

隱岐本新古今和歌集と久原本

小島吉雄

一、隱岐本と久原本

京都の久原文庫藏する新古今和歌集古鈔本中、歌の左下尾に朱點をかけた一本がある。卷十までの零本であるが、卷末に後鳥羽院隱岐御抄本の御跋文を載せてゐる。奥書には、ただ、雖爲惡筆難去依仰後京極殿下重而序書寫之畢こあるだけで、従つてその書傳系統を明にし得ないけれども、書寫年代は大體に於て室町末頃と想像せられる。歌數は九百九十二首、これを流布本の卷十までと較べるに、この方が三首多いことになる。すなはち、流布本になき歌四首、

春下

大伴家持

故郷にはなはちりつつみよしの山のさくらはまださかずけり

(此の結句、本によつては、まださかぬなり、とある。烏丸本には、さかすなり、家持集では、さかすけり)

太神宮に百首歌たてまつり侍し中に

太上天皇

いかにせむ世にふるながめしばの戸にうつろふ花の春の暮かた

隱岐本新古今和歌集と久原本

夏

花橘に郭公なき侍ければ

増基法師

ほこぎぎす花たちばなの香ばかりになくやむかしの名残なるらむ

(藤村氏の烏丸本新古今和歌集には、此歌、詞書がない)

秋上

家に七夕の心をよみ侍ける

宇治關白太政大臣

契けむほごはしらねぎ七夕のたえせぬけふの天の川かぜ

(圖書寮烏丸本には此歌の詞書が「宇治關白太政大臣家に七夕の心をよみ侍ける」となつてゐる。これは、久原本の方がよる
しいと思はれる)

〔以上四首とも、久原本には「ナシ」ミ傍書がある。恐らく此れ等の歌が校本に無かつたこゝを意味するのであらう〕
流布本にあつて本書になき歌

春下

題しらず

厚見王

かはつなく神なび川に影見えていまかさくらむ山ぶぎの花

(本によつて、作者「原見王」となつてゐるのがある。これは厚見王を正しいとせればならぬ)

これで差引流布本の方が三首少くなるのである。

註、由來、新古今集は諸傳本それぞれその所收歌數に相異がある。昭和五年四月雜誌水滸増大號に武田祐吉氏が此の點についてありがたい記述を試みてゐられるが、わたくしの見た本の中には、氏のあげてゐる歌の外に、霧旅部、讀人不知、神風の伊勢のはま萩をり敷て、の歌の次に、

西宮左大臣家屏風にしかの山をかきたる所をよめる

源 順

名をきけば昔ながらの山なれどしぐるる秋ぞ色かはりゆく

といふ一首の入つてゐるのがあつた。この歌は流布本にも武田氏のあげてゐるごの本にも出てゐないものである。

さて、此の久原本には、卷第一の半頃まで歌頭に撰者名が記入せられてゐる。これは、多分、校本によつて本文書寫ののちに記入せられたものらしいが、他本も必ずしも一致しないので、若しこれが全卷にわたつて記入せられてゐたら參考にするに足りるものだつたらうと思ふ。今はあまり參考ならぬのが殘惜しい。

蓋し、此の久原本の價値は歌尾にかけられた朱點にあるものの如くである。乃ち、わたくしは、これを武田祐吉、折口信夫兩氏印行するところの隠岐本新古今和歌集と比較してみたところが、隠岐本に於ける朱圈歌と此の久原本に於ける朱點歌と相一致するもの十中八九にあるのを發見した。隠岐本に於ける朱圈は、隠岐に於て後鳥羽院の除棄せられたものなることを意味してゐる。従つて、久原本に於ける朱點もまた隠岐に於ける除棄を示すものだと思はれる。一體、所謂新古今集隠岐本の佛を傳へたものには、武田氏らの隠岐本の外に圖書寮合點本がある。然し、その隠岐に於て除棄せられたりする歌が兩本必ずしも一致しない。わが久原本は、僅に卷十までではあるけれど、此の二本の間に伍して、所謂隠岐本の面目を考察する上に有力な參考資料を呈供するものでなければならぬ。

今、參考までに、合點本と武田氏らの隠岐本と久原本との比較結果を表示してみるに次の如くである。

一、三本共一致して除棄せられたもの。歌數百五十三首。(以下、便宜上、國歌大觀所掲の番號によつて示す)

八、九、一五、二四、三一、七七、七八、八四、八九、九五(以上卷第一)一〇六、一〇七、一〇八、一一三、一二〇、一二七、一二九、一三三、一三五、一三六、一四〇、一四四、一四六、一五〇、一五二、一五五、一五六、一六二、一六六(以上卷第二)一九五、一九六、二〇七、二一二、二一六、二三三、二三六、二三九、二四七、二五七、二七五、二七六、二七七、二七九(以上卷第三)二九六、二九七、三〇二、三一四、三二〇、三三二、三三七、三三一、三三五、三三七、三六〇、三六三、三六六、三七四、三八四、四二二、四二一、四二六、四二九、四三四(以上卷第四)四六五、四六八、四七〇、四七一、四九二、四九三、四九九、五〇四、五一三、五二四、五二六、五三六、五四五、五四九(以上卷第五)五六〇、五六二、五六三、五六四、五六七、五六八、五七八、五八三、五九二、五九六、五九七、六〇九、六一二、六一四、六二二、六四〇、六四四、六五〇、六五二、六五三、六五九、六六六、六六九、六七六、六八三、六八四、六八六、六九四、七〇〇、七〇二(以上卷第六)七一、七二四、七二五、七二一(以上卷第七)七六二、七七三、七七四、七九〇、七九一、八〇〇、八〇八、八二二、八二五、八二六、八二一、八二二、八二三、八二四、八三四、八三九、八四三、八四四、八四五、八五一、八五二、八五三、八五六(以上卷第八)八六九、八七〇、八七二、八七六、八八二、八九〇、八九二、八九三(以上卷第九)九〇一、九〇二、九一四、九二二、九三三、九三二、九四〇、九五六、九六三、九六六、九七四(以上卷第十)

此のうち、九五、三一四の二首は隱岐本で作者の上に朱圈なく、七九〇は題詞の上に朱圈がなく、一〇八の歌は歌の上に、八七六のは題詞にも歌にも何れも朱圈を缺いでゐるが、これらは、合點本と久原本とによつて朱圈のあるのが當然だと認定して、此の表の中に加へた。

二、久原本と隱岐本とが一致して合點本と一致しないもの、

イ、久原本で、撰び残されてゐる場合、

四九八、五一九(卷第五)六〇二(卷第六)七八三、八〇七(卷第八)八七五、八七九(卷第九)九一七(卷第十)

ロ、久原本に撰びすてられてゐる場合、

七八〇、七八一（巻第八）

三、久原本と合點本と一致し隠岐本と一致しないもの

イ、久原本に撰び残されてゐる場合、

六、三三二（巻第二）一三七、一四一、一六五（巻第二）一九二、二三五（巻第三）五九一（巻第六）七五六（巻第七）七九八、八四二、八五五（巻第八）八八〇（巻第九）九〇五、九〇六、九一三（巻第十）

ロ、久原本にすてられてゐる場合、

五一、一九三、三五八、三八六、三九五、四三八、四五四、六二七、六三〇、七〇五、七四九、八〇九、八三一、九四二、九七二
四、隠岐本と合點本と一致し久原本と一致せざるもの、

イ、久原本にえらび残されてゐる場合、

二、一八、二三、九七、一一二、一二四、一三八、一六四、三六五、四二五、五四二、五四六、五五〇、六一一、六五五、六八九、八八九、八九一、八九四、九二五、九六二

ロ、久原本にはすてられてゐる場合、

一〇、九八、三二三、七五五

なほ、此の外、隠岐本に朱圈の施された歌で、

春下

中納言家持

ふるさきに花はちりつつみよしのの山のさくらはまださかぬなり

夏

増基法師

ほこぎぎす花たちはなの香ばかりに鳴くやむかしの名残りなるらむ
の二首は、合點本になく、久原本には傍書「ナシ」こあつて、點がかけられてゐず、
夏

ほこぎぎすむかしをかけてしのへみや老のねざめにひこころぞする

顯 昭 法 師

赤 染 衛 門

秋下
五月雨の空だにすめる月影になみだの雨ははるまもなし

前大僧正慈圓

哀 傷
立田山秋ゆく人の袖をみよ木木のこずゑはしぐれざりけり

盛 明 親 王

離 別
世の中のはかなきこころを見る比はねなくに夢の心ちこそすれ

和 泉 式 部

釋 旅
たれなりにおくれさきだつほぎあらばかたみにしのへ水ぐきの跡

凡 河 内 躬 恒

浪の上にほのみにえつつ行舟は浦ふく風のしるべなりけり

の六首は、久原本にも合點本にも見えぬ歌である。従つて、之れら八首は上の比較表には載せてゐない。

二、後鳥羽院の御歌判標準

後鳥羽院御口傳に、藤原定家の歌を評して

「こころ葉やさしくえんなる外は、こころもおもかげもいたくはなきなり」

と仰せられ、西行俊成の歌を評しては、

「こころ葉も優にやさしきうへ、こころもこころにふかくいはれもあるゆゑに」

と仰せられてゐる。これによるに、後鳥羽院が當時の通念に従つて歌を心言葉言ひ換へれば歌想と用語との二要素に分つてお考へ遊ばしてゐたことは確かだ。だが、御口傳には、また、

「その中すがたまちまちにしてい隅をまもりがたし。あるひはうるはしくたけあるすがたあり、或はやさしく艶なるあり、或は風情をむねとするあり、或はすがたを先させるあり」

こか、

「凡そ歌のすがたは面のこころにくにして一様ならず、こころにく載するにいとまあらず」

こいふやうに、「すがた」こいふ語が見えてをり「風情」こいふ言葉があらはれてゐる。此のうち「歌のすがた」一様ならず「こか」「その中すがたまちまちにしてい」こかこいふ場合の「すがた」は、今日われわれの所謂歌風と略略同意に考へて差支へないやうであるが、「あるひは姿を先させるものあり」「こか」「心ある様をば庶幾せず、ただ言葉すがたの艶にやさしきを本體させる間」こか仰せられてゐる場合の「すがた」は寧ろ言葉こいふ語に近き内容をさしてゐるものであると見な

ければならない。この場合の「姿」は、風情を相對する語であつて、歌の姿態即ち言葉つづきその言葉つづきの齎す律調感ミを意味するものであり、これに對する「風情」といふ語は、所謂「心」ミ同意語であつて、歌に於ける趣向ミその趣向に伴ふ感じミをいふのであらうと思ふのである。たゞへば、「ただ天性の得たるをもてをのづから風情の妙なるを回らす」といひ、「風情をむねミする」といひ、また「かたき結題を人のよませけるには家の中のものにその題をよませて、よき風情をのづからあれば、それを才覺にてよく引きなほして」といふなきは、すべて、風情を趣向若しくは趣向美の意味に解しなくては理解が出来ないのである。若しここにわたくしの臆斷をゆるされるならば、「言葉」をその表現律調の立場から眺めたものが「姿」であり、「心」をその表現趣向の側から見たものが風情である、といはれやしないかと思ふ。さうして、さういふ風情と姿ミを統一綜合した形に於て看取したのが「歌のすがた」であらう。蓋し、これを表示すれば

歌のすがた（歌風）
 風情（趣向美）……………心ノ世界
 姿（歌調美）……………言葉ノ世界

といふやうなことになるのであらう。

もつとも、歌合の御判詞には、以上の外に「歌がら」といふものが論ぜられてゐる。歌がらといふものは、心、言葉、すがた、風情のいづれにも屬しない、むしろ此れ等ミは別の範疇にあるものらしく、歌がらが卑しい、ミか、歌がらがよろしい、ミか屢々いはれてゐるが、此れは、恐らく一首の歌のもつ風格ミ言つたやうなものを指しておいでになるのであらうと思ふ。

さて、然らば、後鳥羽院のお考へになつてゐた趣向美、歌調美、風格美といふものは、具體的に言へばさういふものであつたか。歌合の御判詞によつて、わたくしは、それをお伺ひ申しあげることにしよう。

院御判の歌合には、建仁初年の千五百番歌合、建仁二年六月の水無瀬約殿當座六首歌合及び嘉禎二年の遠島御歌合があ

るだけで、而も、そのうち千五百番歌合の分は、勝負附だけで御判詞がなく、他の二つミ雖、歌合判詞の常ミして姿の方面に重點をおいて論ぜられてをり、且つ御謙遜の御心から御自らの御製の御批判には特別の御手心をあそばされてゐる御様子も拜せられるので、われわれは此れ等の歌合からは僅に叡慮の大體だけを御察し申しあげ得るに過ぎない。

(一) 歌調の美に就いて。

いかにせむ昔のした行く水だにも人にしられぬ道はしりけり

(御判詞) こけの下ゆく水といへる、いと聞きよくなじ。(以下特に註しないのは遠島御歌合の御判である。)

蓋し、この「聞きよくなじ」ミいふ御評言は、言葉に音調の雅美を欲する心から發するのである。音調の雅美を欲する心は、やがてその雅美をそこなふ用語を排斥する。

あき秋のつゆのよすがのさかり葉も風ふきたつる色ぞ身にしむ

(御判詞) 露のよすがのさかり葉風吹きたつらん、めづらしき様ながら、すべてさかり葉は古今にも侍れどもいたく艶には聞えず。

のやうに、よしんば、それが新味ある表現であつても、えん言ひかへれば雅美の感に缺けてゐるものであるから、この歌を排斥するミいふのである。此の個々の言葉に音調の雅美を求むる心は、そのまま、言葉つづきの律調を重んずる心に發展する。歌全體の律調のよろしき歌は、それだけでも秀歌としての存在價值を主張出来るミまで考へられた。従つて、判詞に於ける後鳥羽院は、特に此の歌調美に力をお入れあそばされて、たけあり、うるはし、優なり、の三つの理念を樹立せられてゐる。

たけあり、ミいふのは、歌調の伸び伸びミして滞りも弛みもなく高朗なものであるが、雅潤の感は含まないものミ見るべく、うるはしは、その雅潤味に乏しきたけある姿に艶麗美雅潤味を添加したものミ考へられ、優は、そのうるはしい姿に更に優美哀婉美の添はつたものミ考へて間違ひはあるまい。これを例示すれば、

たけある歌

風むせぶ檜原の時雨かきくらしあなしの嶽にかかる村雲

うるはしき歌

朝日かげまだいでやらぬあしひきの山はかすみの色ぞうつろふ

定めなき風を待つまもうつろひぬ本あらの萩に結ぶ白露

優なる歌

數ならぬみ山かくれを尋ねてぞ心の末の花も見るべく

しらがしのしらぬ山路になりぬさもをくれじと思ふ峰の松風

歌調に、たけあることは必要なのである。他にすぐれた點があつても、

左 勝

風むせぶ檜原の時雨かきくらしあなしの嶽にかかる村雲

右

ものおもへば雲のはたてを限りにて時雨もいたく降りみだるかな

(御判詞) 右歌しぐれもいたくふりみだる、やさしきやうなるを、左歌あなしの嶽にかかる村雲たけ有りてみゆれば勝とすべし
こあるやうに、たけある方に價値を認められる。しかし、たけある歌は必ずしも理想的な歌調とは言ひがたいので、

けふはまた明石のとよりこき出でてつらき枕にのこる月かけ

(御判詞) 長あるやうには見えながら、えんなるさまには聞えず。

こいふ御非難があり、また、

左

ふるさとの萩の下葉も色つきぬ露のみ深き萩のうらみに

右

しらつゆの玉をきみだる萩の枝に泪かすそふ萩の夕ぐれ

(御判詞) 左右ともにやさしきやうなれども右はいますこしたげも有りて豔にも聞ゆ。

と仰せられる。すなはち、院は、此の「たけある」事を基礎として其の上に雅潤艶麗の美を加へたものを要求あそばしてゐる。おもふに、院の歌調美に於ける御理想は、うるはしき歌、優なる歌にあつたものであつて、高朗の歌調に艶麗優美の感を加味したものを以て歌調美の極致とあそばされたのではないかと拜せられるのである。

院はまた、をかしさいふ語を以て言葉つづきの上に興趣ある配列を、また、めづらしさいふ語を以て言葉すがたの上に新鮮味を、それぞれにご要求あそばされてゐるのであるが、それらも全體の律調美をそこなはぬ範圍に於てのめづらしさであり、をかしさであつた。

(二) 趣向の美に就いて。

趣向美に於ける院の御考を煎じつめるに、やさしく面影ある歌、趣向のめづらしい歌、あはれ深き歌、此の三つを理想美とするにある。一體、御判詞を伺ひ奉るに、

戀瀬川つれなき中に行く水は年もせかれぬ涙なりけり

(御評言) 右歌年もせかれぬ泪なりけりといへるよろしく見ゆ。

高砂の尾の上の松の初時雨ふるにかひなき世をやこらむ

(御評言) 右たかさの松の時雨にそまねをふるにかひなきとよそへたるおもふ所ありてよろしく見ゆ。

なご、知巧的趣向或は機知的言ひまはしのよろしき歌を推賞せられてゐるが、この知巧的に趣向をめぐらす場合に、最も

有力なヒントを與へるものは古詩古歌の類である。後鳥羽院は漢詩のこころは殆ど仰せられてゐない。院の語らせ給ふのは主として古歌の應用についてである。古歌の趣向辭句を自作に應用するのは所謂本歌取りである。院は、本歌取りの善惡を非常に問題にあそばされる。

山たかみみだれて匂ふ花櫻人もすさめぬ春やへぬらむ

(御判詞) 山たかみ人もすさめぬさくら花といへる本歌のこころよし、尤も勝とすべし。

神さぶる歌の森のほととぎす引くしめなはもなくなくやこし

(御判詞) れぎことなまのみまきけむ社こそはてはなげきのもりとなるらめといふ歌をとれる、よろしく聞ゆ。

つつめども心の空にたつ雲のきえぬものからしる人はなし

(御判詞) 下句きえぬものからよるかたもなしといへる本歌に似て侍り。七文字をとる事は定まれる事なるを又の七文字のうち三文字を取れるに文字のおきごころも同じゆゑにや、耳にたちて聞ゆ。

元來、本歌取りは、本歌のこり方に知巧的趣向の面白さを見出す事の外に、一首のうち本歌の風情がおのづから聯想せられて一層その情趣を増すので喜ばれるのである。従つて此の本歌取りを賞美する心は、一首の背景に優雅なる聯想を起させる歌を喜ぶ心と相通するものでなければならぬ。院は、もちろん、

すまの浦もしほの枕とぶ盤かりねの夢踏わぶと告げこせ

行平の中納言もしほたれ偲びむすまの浦誠に面影もある心地してありがたく侍るうへに、秋風ふくとかりに告げこせなどいへる古歌思出でられ結句などこにやさしく侍り。(水無瀬釣殿六首歌合)

こやうに、此の古歌古事のおもかげのしのばれ、さまざまの聯想を浮ばせる歌が好ましきものにお考へあそばされた。うら人の鹽やく里の朝がすみ春の物とやわかで見らむ

(御判詞) 春のものとやわかでみるらむといへる兼平が歌に春の物とながめくらしつとよめるも思ひいだされてやさしく見ゆれば天の河秋の一夜の契りだに片野に鹿の音をや鳴くらむ

(御判詞) 秋の一夜のちぎりだにといひてかた野に鹿のとつづきたる殊にやさしく聞ゆ。惟高のみこ片野に狩してたなげたつめにやごかりしむかしまでおもひよそへられておかしく侍り、何さま右は秀逸と見ゆれば尋常の歌ならぶべきにあらず。

かくて、やさし、こいふ理念が生れる。やさしきは、言葉や趣向が優雅な聯想をもたらし且つその聯想によつて一首に一層風情を添へる場合に名づけられたものである。御口傳に、やさしく艶なるを欲せられた御心もやはり同じである。これは、換言すれば、一首のうちに複雑な情趣をもこむる心であり、餘情の優艶を庶幾する心でなければならぬ。

次に、趣向のめづらしい歌の例をあげてみれば、

春よときとはかりききし鶯の初音を我とけふやなかなむ

(御判詞) 初戀の心めづらしく侍るへし。

これは一首の構想の嶄新なのである。

我戀は忍ぶの衣しのふともしらでみだるる袖の月影

(御判詞) いとめづらしくはわれども、さして難は見えず。

これは一首の趣向が常套的なを指摘して居られるのである。凡そめづらし、こ仰せられてる場合には、言葉の場合もあれば、かくの如く趣向の場合もあるのだが、特に言葉姿を御指摘せられてゐない時は、すべて此の趣向構想の場合を拜察してよろしい。で、この様に嶄新をこひねがふ心から、たゞへその歌に難點はなくとも、めなれたる風情の故を以てこれを斥けられる。めなれたるこは、常套的の意である。たゞへば、

左

もらさごと岩こそ涙をせきかへし袖にくだせるせせの白玉

(御判詞) 左歌忍戀におほくきこゆるふる事なれども、いたくあしくは見えず。

おもふこと岩れの音に涙かけてかはらぬ色にぬるる袖かな

(御判詞) 忍戀につれによむ風情なり、いたくめなれたれば持とすべし。

こある。

「あはれ」こいふ語は、めづらしくも同じく、言葉にも心にも言はれるものであるが、院は特に心ふかくあはれなるを強調あそばされたやうである。御判詞から伺へば、

神無月時雨ばかりぞ横の屋に昔ながらの音もかはらぬ

(御判詞) させる事はなれども、かはらぬ事は時雨ばかりとよめる、あはれなるやうなり。

こある。あはれは元來は感動の歎辭であるが、院なきの御使用例によるこ、涙もろき感傷心のこもつてゐるものを指してお出でになるやうである。この感傷心は、院のもつこも好みたまたまうたこころであつたらしく、

左

數ならぬみ山がくれを尋れてぞ心の末の花も見るべき

右

まがひこし雲をばよそに吹きなして峰の櫻に匂ふはる風

左右ともに優に聞え侍れども、こころの末の花猶いろふかく見ゆ。以左爲勝

の御判詞に於けるが如く、その姿に優劣なき場合には、叙景的よりも抒情的を、感覺的よりも感傷的なる方をもつて勝あそばされてゐる。同様の例は、

左

かみな月くもらぬかたの空までも風にみだれてふるこぐれ哉

右

忘れぬ昔は遠くなりはてて今年も冬ぞ時雨來にける

左歌疊らぬかたの空までも風にみだれてとよめる、よろしく見ゆるを、右歌、ことしも冬ぞ時雨きにけるといへる、をかしく聞ゆ。勝負わけがたれども、なほ昔は遠くとおける心あはれに待れば勝と申すべし。

で、趣向美に於ける院の御理想は一首の中に此の三つの長所をかね備へてゐるのであらうが、必ずしもさういふ秀歌のみでもないから、その一つ又は二つをでも有つてをれば、これを秀歌として賞美せられたやうである。

(三)風格美に就いて。

左

さくら花空にあまぎる白雲のたなびきわたる葛城の山

右

櫻さくながらの山の水き日も昔を戀ぬ時の間ぞなき

右懷舊のこころさしあはれなれども、歌から左聊勝つべきにや

また、

さのみやはつれなかるべき子規れさめの空にこころもがな

(御評)その上歌がらも無下に見ゆるなり

これらによつて察するに、歌がらこは、歌調のおのづからに具備する品格そのものをいふものやうである。歌詞よろしき歌は、歌がらもまた悪くはない。

しがらきのとやまの紅葉ちりばててさびしき峰にふる時雨かな

この歌を、「やすらかにて歌がらもあしからず」にして勝にせられたのも、前に掲げた、「さくら花空にあまぎる白雲の」

の歌を「歌がら聊勝つべし」ミせられたのも、歌調が流麗であつて、共に氣品を保有してゐるからである。では、さういふ氣品がさういふふも、それは一口には言ひきれない。「歌がらさまでなし」ミ評せられた

さびしさは庭のま業にふく風のそよ音信れて人は問ひ來す

さういふやうな歌ミ前掲のミを比較すれば、自ら悟るミところがあるであらう。歌がらのよろしき歌は、さういふスマートな感じ、寸分の隙のない品のよさをもつてゐるのである。

かくて、思ふに、後鳥羽院は、歌調に於ては優麗艷美の調を、趣向に於ては清新にして複雑な情趣美ミ甘美な感傷性ミを、それぞれ庶幾せられてをり、且つ其れ等の上にスマートな品位さういふものを期待せられてたさういふ結論なるであらう。

後鳥羽院御口傳の冒頭の御言葉によれば、院は、風情に於てすぐれてゐる秀歌も、姿に於てたたまさつてゐる秀歌も、共にお認めになつてゐる。そして、たさういふへば、藤原定家の

秋とたに吹きあへぬ風に色かほる生田の杜の露の下草

の歌は、心風情にこれさういふこゝにはないけれども、言葉姿がすぐれてゐるが爲に、すぐれた歌ださ賞讃せられてゐる。しかしながら、院の秀歌に於ける最高の御理想は、「こゝに葉も優にやさしきうへ、こゝころもこゝにふかき」こゝころにあつたものの如く、今のべた、歌調美、趣向美、風格美が一首のなかに渾然さうして融合しその至美を發揮せるものを究極の御理想さうなされたものであつた。御口傳には、

釋阿(藤原後成)はやさしくえむに、こゝころもふかく哀なるところもありき、ことに愚意に庶幾するすがた也。

ミ仰せられてゐる。水無瀬釣殿當座六首歌合に、御製、

思ひつつへにける年のかひやなきただあらしの夕暮の空

を「さしたる」がなくば一番なきは可勝歎」を仰せられてゐるのは、恐らくは御自讃の歌たることを表明あらせられてゐるのだらうと思ふが、この歌の如きも複雑な背景をもつた感傷のこもれる抒情歌で、歌調も優麗の美を失はず、洗練せられた歌品またかね備はつてゐる。

却説、以上、院の所謂歌調美、趣向美、風格美を具體的に御検討し奉つたのであるが、いふまでもなく、これらの美を發揮するには夫れ夫れ適當な用語や適當な構想が相伴はなければならぬ。御判詞に於て、難を稱せられるものは、此の用語なり構想なりに缺陷があつて上述の美を發揮する障礙をなしてゐるものを指摘せられたものである。われわれは此の難の内容を吟味することによつて、更に、また後鳥羽院の實際選歌にあつての御標準を御推察申しあげることが出来る。難は無論、用語上の難を構想上の難に分れる。

A 用語上の難。

第一、歌調或は風情に適合しない言葉。

偽の色には見えむ神無月つれなき松に時雨降りなほ

偽りのなごいへる、こひれがふべきやうにもあらず。

あまの戸のあけゆく空はうれしきを猶はれやらすたつ霞かな

うれしきなといへる庶幾せられず。

いまもなほむかしや戀ふる橘の花ちるさになくほととぎす

末の句いかにぞや聞ゆ。

第二、同義語の重複。

年をへてひげごよはらぬ梓弓さてやゆづるのかけはなれけむ

歌がらはことごとしげにていやしきまには見えざるを、上句に梓弓といひて下句にゆつるとよめるは、もつ同じ事によ。

やまのはにありあけの月の残らずは霞に明るそらを見ましや

かすみに明るそらを見ましやといへるあじからず見ゆるを、上句に有明とおきて下句にかすみにあくるといへる、すこしおぼつ
かなくや侍るべからむ。

第三、意味の充分に通じがたき用語。

露すがる庭の萩原いろつきぬいかなる人の思ひそむらむ

萩の人の思をそむらむ事、いかなるべしとは覺えず。

いもせ川かさなる年のかひぞなき泪ばかりはうき沈めども

なみだ計はうきしづめどもとよめる、いささかおぼつかなく聞ゆ。

B 構想上の難。

第一、趣向の前後一致せざるもの。

泣くなみだ淵となりても年はへぬいつまで袖の下によごまむ

淵となりて年はへぬとよめる久しき心もつよく見ゆるに下句にいつまで袖の下によごまむといへる、忍ぶ心にかたざれるやよこ
なかるべき。

第二、題意に添はざるか、若しくは題意の表現の不充分なるもの。

夜鹿

左

二、後鳥羽院の御選歌態度と隱岐本

隱岐本に於て除かれた歌は、何等かの意味で叡慮に添はなかつたものであつたに違ひない。だが、さういふ點がお氣に召さなかつたのかといふことになると、除棄の御理由がしるされてゐないから、われわれには、はつきり分らない。わたくしには、ただ前章にあげた院の御歌判標準に除棄せられた歌を照しあはせて、そのおほよそを類推申しあげることが出来るだけである。さて、わたくしの考へるところの除棄てられた理由を類別してみると、ざつと次の通りとなる。

(一) 本歌ミリの拙い歌。たゞへば、秋上の

みづぐきの岡の葛葉も色づきて今朝うらがなし秋のはつ風

こいふ歌は、萬葉集卷十の「雁がねの寒く鳴きしゆ水莖の岡の葛葉は色づきにけり」こいふ歌を本歌としてゐるのであるが、本歌と此の作を比べてみるに、本歌の趣向がそのまま此の歌に借り用ゐられてゐて、そこに作者の興味ある趣向上の工夫こいふものが乏しい憾みを感じる。由來、本歌取りは、戀の歌を季節に借りなしたり、或は秋の季の歌を春の歌に借り用ゐたりなきして、その本歌を背景に感ずることによつて、一首のうちに二重の情趣美を醸成しようとするところに其の妙味があるのであるが、この歌の場合では、その本歌ミリの妙味が充分發揮せられてゐない。此の歌の除かれた理由はこの點にあるのであらうと思ふ。戀一の

みづぐきの岡の葛葉を吹きかへし誰かは君を戀ひむもおもひし

本歌、みづぐきの岡のくす葉を吹きかへしおもしろ子らが見えぬ頃かも

或は夏の部の

郭公いまひまこゑはおもひ出でよおいその森のよはのむかしを

本歌、東路の思出にせむ時鳥老曾の森の夜半のこゑ

なき、かうした類例は、尠くないのである。

(二) 趣向の陳腐にして常套的なる歌。譬へば秋上の

秋はただ心よりおく夕露を袖のほかにもおもひけるかな

のやうに袖の涙を露や時雨にいひかけるのは古くから盛んに用ゐられた技巧であつて、既に型にはまつた趣向になつてゐる。従つて、此の「秋はただ」の歌をはじめ、此の種の傾向のものは、凡そ他に長所のない限り、みんな除棄せられてゐる。所謂「めづらじからず、めなれたれば」除かれたのであらう。すなはち、

このは散る時雨やまがふ我袖にもろきなみだの色さ見るまで

しぐれかききは木のはのふる物をそれにもぬるるわが袂かな

澤におふる若菜ならねばいたづらに年をつむにも袖はぬれけり

露は袖に物おもふころはさぞなおくかならず秋のならひならねき

なき、みな此の同類でなければならぬ。

吉野山花やさかりに匂ふらむふるさみさらぬみねのしら雲

まぎちかきいささむら竹風ふけば秋におごろく夏のよの夢

これらも矢張り此の部類に入るべきだらう。後の方のなき、新古今集でも此の歌のすぐ前に同趣向の歌がある。

(三) 題意の充分に生かされてゐない歌。譬へば、秋上の

み山路やいつより秋の色ならむ見ざりし雲の夕ぐれの空

これは「山路秋行」といふ題でよまれた歌だが、本居宣長も論じてゐるやうに、趣向の上に題意が充分はたらかされてゐない。また、「見れども逢はぬ戀」といふ題で、

人知れぬ戀にわが身は沈めどもみるめに浮くは涙なりけり

の歌は、上句忍ぶ戀の心にもまれて、題意が充分に出ない。他にも、かういふ類に入るのが相當多いのである。

(四) 歌調や意味の上から妥當をかく用語の歌。たゞへば、春上、春山月、

山ふかみなを影さむし春の月空かきくもり雪はふりつつ

の歌に於て、「空かきくもり」が春の月かげに對して意味の上から穩かでない。また、「雪はふりつつ」とある以上「影さむし」も重複である。院の御言葉を借りれば、この歌は、「言葉のよせなし」といふでもいふべきところであらう。

ふかくさの里の月かげさびしさも住みこしまの野へのあき風

歌合の御判詞の例にしたがへば、この「さびしさも」も庶幾せられぬ姿でなければならぬ。

(六) 歌調に暢達優艶味をかく歌。

冬の部

しら浪に羽うちかはし濱ちぎりかなしき物は夜半の「こゑ

これは、言葉つづきがよろしからず、暢達を缺くものである。

秋上

たつた山夜半にあらしの松ふけば雲にはうきみねの月影

これは、たけある姿ではあるけれども、艶麗味が缺てける。

秋上

萩が花ま袖にかけてたかまぎのをへの宮に領巾ふるや誰

入日さすふもこのをばなうちなびきたが秋風にうづらなくらむ

これらも矢張り優艶味のない歌である。

(七) 聯想美をもたない歌。

春にのみ年はあらなむあちを田をかへすがへすも花を見るべく

けふだにも庭をさかりさうつる花きえずばありこも雪かこも見よ

わが宿の物なりながらさくら花ちるをばえこそこぎめざりけり

趣向が理窟つほくて且つ單調で、具象的な聯想を呼ばない。これは、前章にのべた後鳥羽院の趣向美の御標準にあはない。従つて除棄てられてゐる。

院はその歌の背後に情趣深い優艶な世界を聯想させる歌を喜ばれた。それは複雑な内容を歌に含ませむとする趣向を要求する心である。自然、さういふ心は、物語的情趣美を歓迎する。

をしめぎもちりはてぬれば櫻ばないまは木ずるをながむばかりぞ

このほぎはしるも知らぬも玉鉢のゆきかふ袖は花の香ぞする

見渡せば花も紅葉もなかりけり浦のこまやの秋の夕暮

この夕ふりつる雨はひこぼしのこわたる舟のかひのしづくか

あちを田のこぞのふるねのふる蓬いまは春へこひこばへにけり

すなはち、物語的情趣美に缺けた歌である。趣向が單調な歌である。

風まぜに雪はふりつつしかすがに霞たなびき春は來にけり

時はいまは春になりぬこみ雪ふるこほき山べに霞たなびく

のやうな即景直叙の歌も、此の複雑な趣向美なく、物語の聯想美に缺くるが故に除かれたのだらうと思ふから、やはり此の部類に入れるべきであらう。

(八) 贈答歌の贈の歌の除かれた場合の返し歌。

此の場合は、返しの方が善い惡いに拘らずきまつて贈の方と一緒に除かれてゐる。例は一々あぐるにも及ぶまい。但し贈の方が除かれてゐない時には、返しの方は除かれてゐる場合も除かれてゐない場合もある、それはその返歌の善惡によるのである。

(九) 院の御好尚にあはざる歌。

前章にあげたやうに後鳥羽院はその御判詞の中で、ほこぎすの鳴かないこいふ趣向は面白くない、こ仰せられてゐるが、夏の部

ありあけの月はまたぬに出でぬれき猶山ふかきはこぎすかな

を除きすてられたのは、恐らくそれと同じ御趣意から出たのであらう。かういふのは、なほ他にもあるべき筈で、「たれしのべ」「たれ秋風」「たれか知らまし」こいふやうな言ひ方をした歌が數多く棄てられてゐるのも或は此の部類に屬すべきものかも知れない。

ふる雪にまこごに篠屋いかならんけふは宮こに跡だにもなし

こいふのは、遠島御歌合に、

左

軒はあれて誰かみなせの宿の月過ぎにしままの色やさびしき

久方のかつらの影になく鹿の光をかけて聲もさやけき

左歌すべていたくあしくもなきをあらはに夜といふ事見えすなごいふ難は侍らむすらむ。

朝霞

さえかへる雪けの春の朝くもり霞むなのみや空にたつらむ

かすむ名のみや空にたつらむといへる悪しからず聞ゆれども、題の心におもへば名ばかりの霞はなほいささかをとるべくや。

第三、常識にあはざる趣向のもの。

さびしさは庭の真柴にふく風のそよ音信れて人は問來す

いかなるやま里にも庭に柴の生ふること見えず。

時雨つつ風さだまらずなるままにむら雲まよふなちこちの山

むら雲まよふ遠近の山又よろじきやうなるを、冬の初として風定まらずとよめる事、常には聞えず。

第四、評者の好尚にあはざるもの。

さのみやはつれなかるべき子規れざめの空に一こゝろもがな

ほととぎすの題にいまだきかざる心本意なくや侍らむ。

柴の戸をあさけの夏の衣手に秋をともしなふ松の一こゝろ

夕なごや松風ともなふべき柴の戸をあさけの衣願るよせなきに似たるをや。

わたくしは、後鳥羽院の御歌學書並に歌合御判詞によつて、以上、院の御歌論若しくは御歌判標準といふものを御考察申しあげたのであるが、上にのべた院の御考へは同時に御選歌の際の御標準となるものである。わたくしは、此の御標準を水先案内として、更に進んで、隱岐本御撰定にあつたつての院の御態度をお伺ひしたいと思ふ。

右

淋しさはまだ見ぬ島の山里を思ひやるにも住むこちちして

左右ともにおもひやりたる山の家に侍るをいまだ見ぬを思ひやらむよりは、とし久しく見ておもひ出でんは、今少し心ざしもふかかるべければ、相構へて一番は左の勝とすべし。

ミ仰せられてゐるのミ同じ御理由によつて除かれたものと思ふ。蓋し、此の「ふる雪に」の歌の前に、瞻西上人の

つねよりも篠屋の軒ぞうづもるる今日は都に初雪や降る

があつて、この方は除かれてゐず、その返しである「ふる雪」の方が除かれたのは、瞻西上人の場合は、曾て住みなれた都を遙かに懐しんだのであるが、返しの方は、まだ見ぬ山里を思ひやつての詠だから、したがつてそれだけ實感の深さが乏しいわけで、遠島御歌合の右歌の場合ミ同種である。わたくしは、恐れ多いこゝみながら、後鳥羽院はその御痛ましい御體験からしてかういふ實感のふかさを求められる御心持が切實に渡らせられたのであらうミ拜察し奉るのである。同じ遠島御歌合に、

山ひめの霞の袖も紅にひかりそへたるあさ日かげかな

の歌を、「かすみの袖も紅に光そへたる朝日かけ、あまり華やかに聞ゆるにや」ミ仰せて斥け給うてゐる。やはり、これもその御境遇が齎した御趣味によるのであらうと思ふ。院は(八)にあげたやうに一方では趣向の巧緻を重んぜられながら、また一方ではかくの如く華麗な、そして作爲の歴然たる歌を拒否する御心になるせられたのである。

みよしのの高ねの櫻ちりにけり嵐にしろき春の明ぼの

あふさかや木ずゑの花をふくからに嵐ぞかすむせきの杉むら

のやうな歌を棄てさせられたのは、また此の御心から出てゐるものやうに拜せられる。當時の院の御好みは、御實感にひきあてて、あはれ深きを好ませ給うたので、ただ華麗にして抒情味に乏しい如上の作品を除棄てさせられた。即ち、こ

れもその御趣味の御標準による御選擇である。

以上のまほり見てくるに、隱岐本に於ける御選歌は大體に於て御歌判書によつて伺ひ奉つた御標準に一致するのを見るのであるが、ただ此の(九)の最後の二例は、後鳥羽院の御好みが、隱岐御遷幸以後に變つて來たこゝを物語る有力な證據だと思はれるのである。但し、院の御好みは昔も今も全くその質を異にしたものであるかきうか、こいふこゝになるこゝ昔、新古今の御選歌當時にも、か様なお好みの傾向があらはれてゐたので、全然その質を異にしてゐるものこゝは思はれない。一口にいふと、これは量の變化である。

試みに、千五百番歌合の卷第九及び卷第十の御判を拜見するに、

左

このゆふべ風吹きたちぬ白露にあらそふ萩をあすやかもみむ

右勝

夕まぐれ待つ人はこぬ故郷のもこあらの小萩風ぞこふなる

の如きが屢々見えてゐる。これは院が概念的説明の歌より印象的景趣に聯想を呼ぶ歌を好ませられたこゝを物語るものである。更に、ごちらも印象的景趣を描出した場合には

左

浪のうつ玉の浦わのあら磯に光をくだく夜はの月かな

右勝

月をのみ伏見のささの秋の暮松風ならでこふ人もなし

のやうに、あはれ深く物侘びた趣の勝つた方を採り給うてゐる。即ち、後鳥羽院には、繪畫的景趣の歌の中にも、詠歎的要素が濃厚にあり、情緒的、感傷的な分子を含んでゐるのを其の頃から尊ばれてゐたのである。此の點、遠島御歌合の御判詞によつて拜察申しあげた點ミ少しも違はないのである。隱岐に於ける院の御好みは、蓋し、此の御傾向の繼續であつて、切實な御體驗によつて此の御傾向が一層沈潜的になり純化せられて來たものだミ考へ奉るのが妥當であらう。即ち質的變化でなく量的變化なのである。後鳥羽院には藤原定家なきには見られない、あたたかい心の通つたミころ、情緒的なやさしさがあるやうである。乃ち、その御歌學の上にも、その御作品の上にも藤原俊成の影響が大きいのを感じる。

隱岐本御撰定の御目的は、一には集中の劣作を除き、一には院御自身の御製の數を減じ給ふにあつたやうである。前者は集の精撰を期し給ふ御心より出で、後者は院の御謙遜の御心より出でゐる。但し、隱岐本の御跋文によれば、集の面目を變ずるやうな改撰は望ませられなかつた。こゝは明かである。従つて、集中の歌の精撰にあつて各卷の卷頭歌や藤原良經の序文に出てくる歌には、たゞへ其の中には御氣に召さぬ歌があつても、原體裁を損ずるをおそれ此れには手を加へられなかつた。いふやうな御斟酌があつただらうミ想像し奉る。こゝが出来るのである。これにひきかへて、院御自身の御製には、全く何の御斟酌もなく、出来るだけ嚴密な取捨の態度で臨ませられたミ考へ得るのである。御製の除かれたものの御製全體への割合は約五十六パーセントになるが、御製以外の歌で除かれたものの集全體への割合は約十九パーセントにしか過ぎない。而も除かれた御製必ずしも除かれざる御製外のものより劣つてゐるミは考へられぬ。わたくしは、そこに叡慮のうちに區別せられるものがあつたのであらうミ想像する。

隱岐本御跋文には、

「おほよそ玉のうてな風やはらかなりし昔は、なほ野べの草しけきこゝわざにも紛れき。いさこの門月しづかなる今は、

かへりて森の梢ふかき色をわきまへつべし」。

と宣ひ、

「たちまちにもこの集をすつべきにあらねども更にあらためみがけるはずぐれたるべし。天の浮橋の昔をききわたり、八重垣の雲の色にそまじ輩は、これを深き窓に開きつたへて遙かなる世にのこせきなり」
と仰せられる。以て隱岐御撰抄本に對する御抱負を遙察し奉るべきである。

(附記。先年、久原文庫に訪書の際の覺書をもとに、更に今、後鳥羽院の御歌論の考を加へて、此の一文を草したのである。わたくしは特に新古今集の古寫本を數多く見てゐるわけではない。久原本の如きも専門家にとつては別に新しい發見でもないであらう。且つ短才、時に考案の至らぬ點もあらうと思ふ。先輩の叱正を得たい。なほ、その節、久原文庫閱覽に御便宜をたまはつた吉澤義則博士と鈴鹿三七氏の御二方にこの機會を以て厚く謝意を表したい)